



杜甫「又呈吳郎」の棗について

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学語学文学会 公開日: 2018-12-27 キーワード: 作成者: 大橋, 賢一 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00010695 |

杜甫「又呈吳郎」の棗について

大 橋 賢 一

はじめに

杜甫の詩には、果実が描かれているものが多くある。とりわけ晩年の作品には、ミカンやサクランボなど、現代の日本でも身近な果物を取り上げられているのが印象的である。ここに取上げる「又呈吳郎に呈す（又呈吳郎）」（『杜詩詳注』巻二〇、中華書局、一九七九年）^①には、棗が次のように描かれている。

- 1 堂前撲棗任西鄰 堂前に棗を撲つは西鄰に任す
 - 2 無食無兒一婦人 食無く兒無き一婦人なり
 - 3 不為困窮寧有此 困窮の為ならずんば寧ぞ此れ有らんや
 - 4 祇緣恐懼輒須親 祇だ恐懼に縁りて転た須く親しむべし
 - 5 既防遠客雖多事 既に遠客を防ぐは多事なりと雖も
 - 6 便挿疏籬卻任真 便ち疏籬を挿まば卻て任真なり
 - 7 已訴徵求貧到骨 已に訴う徵求により貧は骨に到ると
 - 8 正思戎馬淚盈巾 正に戎馬を思いて涙巾に盈つ
- 本詩は、大曆二年（七六七）杜甫、五六歳の秋に作られたものである。杜甫はこの三年後、五九歳で死去しているので、こ

れは晩年の作品に該当しよう。本詩は夔州（四川省）の東屯で作られた。

杜甫は、この詩を書く前に、「吳郎」という娘婿と思しき人物に、東屯からほど近い、瀼西という場所にあった自分の家を譲っている。杜甫は、瀼西に二ヘクタールほどの果樹園を構えており、ここで、ミカン畑を中心にウメやスモモ・モモ・ナツメ・クリを栽培していた。^②

この詩の内容は、西隣に住む婦人が、娘婿に譲った土地に実を結んでいるナツメをくすねていくことを大目に見るようになるものである。

杜甫が、吳郎に対してナツメをくすめていくのを見逃せと告げているのは、この婦人に息子がいないこと、また食べ物に困窮していること、そしてそれが重税と戦乱に起因していることよってである。

このように本詩からは、隣人に対する杜甫の優しさが伝わってこよう。ただ、この詩にはいささか疑問に感じることがある。食べ物に不自由をしている婦人はナツメで空腹が満たせるの

か、という点である。ナツメの果実については「果実は長さ約二センチメートルの楕円形で中に紡錘形の大きな核があり、暗紅色に熟し甘酸っぱい味がする。生食するほか、乾果や砂糖漬にしてから干した蜜棗が愛用される。漢方では果実を解熱・強壯剤に用いる。漢名、棗」(『精選版日本国語大辞典』小学館、二〇〇六年)という記述がある。

ナツメは確かに食べ物ではあるが、果物であつて主食になるとは言い難い。多少の飢えをしのごことはできようが、腹を満たすには不十分ではなからうか。先に触れたように、杜甫の庭園には秋の収穫物としては、クリなどもあつたようだから、栄養価の高いこうしたものを婦人に分けるほうがより適切だったように思われる。

本詩は、杜詩の中でも比較的注目されている作品の一つで、例えば、黒川洋一「又呈呉郎」の詩について「既防遠客難多事、便插疏籬卻任真」考(初出は『中国文学報』第二六冊、一九七七年、のち『杜甫の研究』創文社、一九七七年に転載)という専論がある。ただ、この論文にはナツメに関する考察はない。また、古川末喜『杜甫の詩と生活』(二〇四〜二〇九頁、知泉書館、二〇一四年)は本詩を収め、現代語訳ならびに鑑賞文を附しているが、ナツメに関する詳細な検討はない。

そこで本稿では、まず中国の古典一般におけるナツメを概観し、続けて杜詩にみえるナツメを検討し、その特徴をまとめたい。また、杜甫以前の古典詩におけるナツメの描かれ方を概観

し、「又呈呉郎」でナツメがとりあげられている効果について考えてみたい。

I 中国古典にみえるナツメ

ナツメはすでに『詩経』豳風「七月」に次のようにみえる。

六月食鬱及薁 六月には鬱と薁とを食らう

七月亨葵及藷 七月には葵と藷とを亨る

八月剥棗 八月には棗を剥く

十月穫稻 十月には稲を穫む

為此春酒 此の春の酒を為りて

以介眉寿 以て眉寿を介く

「鬱」は、ニワウメのたぐい。「薁」は、蓰薁。ブドウに似る。

「藷」はマメ。「眉寿」は、長い立派なまゆ。長寿を意味する。本詩は農事を月毎にうたったものである。この詩から八月の仲秋にナツメの実をたたいて落とす習慣があつたことがわかる。また、『詩経』以来、ナツメは秋の収穫物の一つを象徴することも確認できる。「眉寿を介く」ものは具体的にはここでは十月に収穫した「稲」で作った酒を指しているようにみえるが、ナツメをはじめとする鬱や薁にも長寿を保つ意味合いが含まれているのかもしれない。

北朝後魏・賈思勰の農業書『齊民要術』卷四・卷一〇(繆啓愉校釈『齊民要術校釈第二版』中国農業出版社、一九九八年)にもナツメの記述がみえる。巻四には「種棗第三十三」があり、

ナツメの種類や栽培方法について、『爾雅』などが引用されて示されている。ここに引かれている『広志』に「西王母の棗、大なること李の核の如し、三月に熟す、(西王母棗、大如李核、三月熟)」とみえる一方で、同じく同書が引用する『鄴中記』には「石虎苑中有西王母棗…十二月乃熟、三子一尺(石虎苑の中に西王母の棗有り…十二月に乃ち熟す、三子一尺)」とみえる。先に引いた幽風「七月」、及びこの記述からナツメの収穫時期は晩春三月、仲秋八月、晩冬十二月にあたるといえよう。

また、卷一〇には、『史記』の記述を筆頭にナツメがどのような効用を持っているのが示されている。

史記封禪書曰、李少君嘗游海上、見安期生食棗、大如瓜。

東方朔伝曰、武帝時、上林獻棗。上以杖擊未央殿檻、呼朔曰、叱叱、先生来來、先生知此篋裏何物。朔曰、上林獻棗四十九枚。上曰、何以知之。朔曰、呼朔者、上也。以杖擊檻、両木、林也。朔来來者、棗也。叱叱者、四十九也。上大笑。帝賜帛十匹。

神異経曰、北方荒内、有棗林焉。其高五丈、敷張枝条一里餘。子長六七寸、圍過其長。熟、赤如朱。乾之不縮。氣味甘潤、殊於常棗。食之可以安軀、益氣力。

神仙伝曰、呉郡沈羲、為仙人所迎上天。云、天上見老君、賜羲棗二枚、大如鷄子。

傅玄賦曰、有棗若瓜、出自海濱。全生益氣、服之如神。

『史記』封禪書に曰く、「李少君嘗て海上に遊び、安期生

の棗を食うを見る、大なること瓜の如し」と。

『東方朔伝』に曰く、「武帝の時、上林に棗を獻ぜらる。上杖を以て未央殿の檻を撃ち、朔を呼びて曰く、叱叱、先生来たれ来たれ、先生此の篋裏何物かを知るか、と。朔曰く、上林に獻ぜられたる棗四十九枚ならん、と。上曰く、何ぞ以て之を知れり、と。朔曰く、朔を呼ぶは、上なり。杖を以て檻を撃つ、両木は、林なり。朔来來は、棗なり。叱叱は、四十九なり、と。上大いに笑う。帝帛十匹を賜う」と。

『神異経』に曰く、「北方の荒内に、棗林有り。其の高さ五丈、枝条を敷張すること一里餘なり。子の長さ六七寸、圍其の長さを過ぐ。熟せば、赤きこと朱の如し。之を乾すも縮まず。氣味甘潤にして、常棗に殊なる。之を食せば以て軀を安らかにし、氣力を益すべし」と。

『神仙伝』に曰く、「呉郡の沈羲、仙人の上天に迎うる所と為る。云く、天上に老君に見え、羲に棗二枚を賜う、大なること鷄子の如し」と。

傅玄の賦に曰く、「棗有りて瓜の若し、海濱より出づ。生を全し氣を益す、之を服せば神の如きなり」と。

『安期生』は『史記』樂毅伝や『列仙伝』などにその名がみえる、仙人の名。「東方朔」は前漢武帝に仕えた臣下であるが、『漢武故事』には仙女西王母の植えた桃を盗んだ話が記されており、後代仙人とみなされている。「沈羲」もここにみえるように仙人である。

大きさが普通のものとは異なっていることが記されているが、これらのナツメは、いずれも神仙に関わっていることが共通している。以上の記述からは、不老長寿と密接な関わりがあることが確認できるが、このことは『詩経』にも暗示されていた、ナツメが不老長寿を象徴することと関係があるろう。

初唐の代表的な伝奇小説『遊仙窟』にも、客をもてなす食材としてナツメが描かれている。『遊仙窟』は、主人公の張文成が神仙の洞窟に迷い込み、そこで二人の仙女に接待され、歓楽の一夜を過ごす物語である。

太谷張公之梨、房陵朱仲之李。東王公之仙桂、西王母之神桃。南燕牛乳之椒、北趙鷄心之棗。千名万種、不可具論。

太谷の張公の梨、房陵の朱仲の李。東王公の仙桂、西王母の神桃。南燕の牛の乳のごとき椒、北趙の鷄の心のごとき棗。千名万種、具に論ずべからず。

ここには、具体的に、北趙の鷄の心臓に似たナツメが描かれているが、これは仙界のご馳走の一つと認められよう。なお、収穫の季節の違うモモなど出されていることから推すと、日持ちするように乾燥させたものなのかもしれない。

以上にみえるナツメはいずれも仙界に関わっていたが、『漢書』卷七十二、王吉伝には、これらのナツメとは異なる描き方がされている。

東家有大棗樹、垂吉庭中。吉婦取棗以啖吉。吉後知之、乃去婦。東家聞而欲伐其樹。鄰里共止之。因固請吉令還婦。里中

為之語曰、東家有樹、王陽婦去。東家棗完、去婦復還。其厲志如此。

東家に大棗樹の吉の庭中に垂るるもの有り。吉の婦棗を取りて以て吉に啖わしむ。吉後に之を知り、乃ち婦を去らしむ。東家聞きて其の樹を伐らんと欲す。鄰里共に之を止む。因りて固く吉に婦を還らしむるを請う。里中之が為に語りて曰く、「東家に樹有り、王陽の婦去る。東家の棗完くして、去りし婦復た還る」と。其の厲志此くの如し。

この話からわかるように、ナツメは、王吉の一度離縁された人の家にあつたことが確認できる。杜甫の詩では、ナツメの樹があつたのは東隣に住む杜甫の家である。またナツメをくすねた婦女が住んでいるのはその西側にあたるため、杜詩にはこの王吉伝が踏まえられている可能性はあるろう。

以上の記述に基づき、中国古典にみえるナツメを整理すると、●仲秋八月に実がなる植物（『詩経』）、●不老長寿をもたらすもの（『齊民要術』所引『史記』『神異経』『神仙伝』傳玄『賦』）、●客人をもてなすためのご馳走（『遊仙窟』）、●保存食（『遊仙窟』）、●王吉の故事（『漢書』）にまとめられよう。

II 杜詩におけるナツメ

杜詩におけるナツメは、「又呈吳郎」を含め、わずか五首に限られるが、興味深いのはこれらには神仙に関わるものが全く

ないことである。以下、制作年代順に確認しよう。

「雨過蘇端」(巻四)には、次のようにナツメが記されている。

也復可憐人 也た復た可憐の人となり

呼兒具梨棗、兒を呼びて梨棗を具えしむ

仇注によれば、この詩は至徳二載(七五七)の春、安祿山の乱により、杜甫が長安に軟禁されていたときのものである。ここには雨の中、友人の蘇端の家を訪問し、酒のもてなしを受けたことが記されている。蘇端は子どもに杜甫のためにナシとナツメを用意させている。春だとすれば、ナツメは乾燥させたものなのかもしれない。ナシも初霜後の保存方法が『齊民要術』巻四に記されていることから、春でも客に振る舞うことができ、可能性はあったろう。収穫されたばかりのナシとナツメが出されたのであれば、これは秋に作られた詩ということになる。どの季節の歌なのかを結論づけられないが、ここではナツメが客をもてなすに値するご馳走の一つとして描かれている。

次にあげた「百憂集行」(巻一〇)は上元二年(七六一)、杜甫が成都にいるときの作で、幼い頃を思い出し、現状を憂える詩である。ナツメは幼少の頃を思い出す冒頭に、

憶年十五心尚孩 憶う年十五 心は尚お孩なり

健如黃犢走復來 健やかなること黃犢の如く走り復た來たる

庭前八月梨棗熟 庭前八月に梨棗熟し

一日上樹能千迴 一日樹に上ること能く千迴す

とみえる。「黃犢」は子牛。「十五」という年齢は「志学」にあ

たる。ここで、杜甫は学問に志すべき年齢であるのに、まだ子どものように木登りをしてナシやナツメをほおぼる自身の姿を思い描く。この詩から、ナツメは杜甫にとって仲秋を象徴する風物であると同時に、健康的な青年期の杜甫の原風景にあたるものの一つであったことが確かめられる。

「李潮八分小篆歌」(巻一八)にみえるナツメは、以上にみてきたものとは異なる。これは杜甫の甥、李潮の書を褒める詩で、七・八句目にナツメがみえる。

嶧山之碑野火焚 嶧山の碑は野火焚き

棗木伝刻肥失真 棗木の伝刻は肥えて真を失う

ここで杜甫は、嶧山にある、秦の始皇帝の時代に活躍した能書家でもあった李斯の碑文が野火に焼かれ、また、この碑文の拓本をもとに作られたナツメを素材とする板木も線が太くなり、原型をとどめていない、という。ここでは板木になる、実用的なナツメの木が描かれている。板木としてのナツメは従来の作品には見えない特殊な例と考えられよう。

「秋野五首」(其一)(巻二〇)は「又呈吳郎」に先行する詩で、大曆二年の作である。頸聯で杜甫が瀼西の宅を吳郎に譲る前、隣に住む婦人がナツメをくすねていくのを黙ってみていること描いている。

棗熟徒人打 棗熟せば人の打つに従せ

葵荒欲自鋤 葵荒るれば自ら鋤かんと欲す

以上のように、杜甫の詩におけるナツメは、●客人をもてな

すためのご馳走(「雨過蘇端」)、●仲秋の収穫物(「百憂集行」)、●板木を作るための素材(「李潮八分小篆」)、●共有すべき食べ物(「秋野」「又呈吳郎」とまとめられよう。

ナツメは杜甫にとっては、生活に密着したもので、仲秋を象徴する、また幼少期を思い出させる食べ物であった。杜甫の詩からはどれだけ空腹を満たせるものなのかは判然としない。ただ、従来の作品では主に不老長寿をもたらすものとして描かれていることからすると、比較的栄養価の高い果実の一つであったことがわかるから、飢餓に苦しんでいる人に分け与える価値のあるものと見なされていたことが想起されよう。

Ⅲ 杜詩以前の文芸作品に描かれているナツメ

杜甫以前の文芸作品でナツメがどのように描かれているのかについて、以下、『文選』及び杜甫以前の詩を確認しよう。

『文選』には二例ナツメがみられる。一つは、西晋・左思「魏都賦」(『文選』巻六)に、魏の都鄴に集まる名産物の一つとして「淇洹の筍、信都の棗(淇洹之筍、信都之棗)」というように、タケノコと並称されている。もう一つの例は西晋・潘岳「笙賦」(『文選』巻一八)にみえる。ここには笙にあわせてうたわれる歌である「棗下之纂纂」の歌詞に、

棗下纂纂、朱実離離。宛其落矣、化為枯枝。人生不能行樂、死何以虚諡為。

棗下纂纂として、朱実離離たり。宛として其れ落ちなば、

化して枯枝と為らん。人生行樂すること能わざれば、死して何をか虚諡を以て為さん。

とみえる。この部分は「ナツメの木の下の葉は、あかい実が多く垂れ下がっている、しかし、その実が落ちたら、枯れ枝ばかりとなる。人としてこの世に生まれたのに楽しむことができなければ、死んでよいおくりなをもらっても意味がない」といったほどの意味になる。この「笙賦」以降、棗の歌を吹くための楽器、つまり「棗」が「笙」という楽器そのものを指すことになった。あわせて、棗の歌に象徴されるように、棗は人生を楽しむことすすめる象徴ともなる。

杜甫以前の詩の用例について、遼欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』(中華書局、一九九三年)を調べてみると、「棗」は一八例みられた。以下、煩を厭わず全ての例を左に示そう。

① 甘瓜抱苦蒂、美棗生荆棘。

(古詩二首)(其二)『全漢詩』卷一一)

② 黄葉離高柯、丹棗坐自零。不惜棗自零、念我少弟兄。

(傅玄「歌」)『全晋詩』卷二)

③ 飢食野棗実。(傅玄「詩」)『全晋詩』卷一)

④ 北園有一棗、布葉垂重陰。外雖饒棘刺、内実有赤心。

(趙整「諷諫詩二首」)(其二)『全晋詩』卷一四)

⑤ 欲求棗下吹、別有江南枝。(謝朓「秋竹曲」)『全齊詩』卷三)

⑥ 鷓鴣已啁晰、棗下復林離。(沈約「詠笙詩」)『全梁詩』卷七)

⑦ 殿多仙女、從來難比方。……散黄分黛色、薰衣雜棗香。

⑧猶聞棗下吹、尚識杏間堂。
（王訓「奉和率爾有詠詩」『全梁詩』卷九）

⑨翠竹垂秋采、丹棗映疎砧。
（劉孝綽「苑建興渚不到陸二黃門詩」『全梁詩』卷一六）

⑩踊躍頰魚出、參差絳棗浮。
（梁簡文帝「納涼詩」『全梁詩』卷二二）

⑪棗野良知歎、瓠河今可儔。
（庾肩吾「三日侍蘭亭曲水宴詩」『全梁詩』卷二三）

⑫錦帳白飄颻、笙歌棗下曲。
（梁元帝「登隄望水詩」『全梁詩』卷二五）

⑬門前一株棗、歲歲不知老。阿婆不嫁女、那得孫兒抱。
（折楊柳枝歌四曲）（其二）『全梁詩』卷二九

⑭東棗羞朝座、西桃獻夜宮。
（李昶「陪駕幸終南山詩」『全北周詩』卷一）

⑮漢帝看桃核、齊侯問棗花。
（庾信「道士步虛詞十首」）（其二）『全北周詩』卷二

⑯南国美人去、東家棗樹完。
（庾信「詠懷詩二七首」）（其二）『全北周詩』卷二

⑰同甘玉文棗、俱飲流霞葉。
（張正見「神仙篇」『全陳詩』卷二）

⑱浮棗漾清漪、落花懸度影。
（江總「三日侍宴宣猷堂曲水詩」『全陳詩』卷八）

これらの中には、従来の用例を踏襲する、⑨のような秋を象徴したり、⑮のような神仙の食べ物を意味したりするものがある一方で、それらには収まらない意味合いを持つ例がある。

①は「甘き瓜は苦き蒂を抱き、美き棗は荆棘を生ず」というように、美味な果実はその味とは逆のもの、ナツメの場合は棘がある、ということが強調されている。④でもナツメのトゲが着目されている。

⑩には「踊躍として頰魚出で、参差として絳棗浮ぶ」とみえる。は、「頰魚」は赤い鱗の魚。「絳棗」は赤いナツメ。ここでのナツメは詩題からも判断できるように晩春の三月を象徴する植物として描かれている。⑱も同様であろう。

⑪は、隄に登って川を眺めつつ、愁いをうたつたもの。その堤防からみた風景を「棗野良に歎を知り、瓠河今儔とすべし」と描く。「瓠」はひさご。酒を入れるひょうたんだとすれば、酒を飲むことで愁いはらすことを意味するか。「棗野」は潘岳「笙賦」にみえる歌詞を象徴しているとすれば、愁いを解消するものと考えられよう。

特に注目したいのは③の「飢えて野棗の実を食らう」という一句である。これは『芸文類聚』巻八七、菓部下・棗に引かれているもので、詩題もなく、この一句が取られているだけである。前後は不明であるが、飢餓の際の非常食としてナツメが利用されていたことを示すものである。

以上のことから、唐以前のナツメは次のように整理できるだ

ろう。

- 地方の名産品（「魏都賦」）、●楽曲・楽器の笙（「笙賦」）
- ⑧⑩⑫）、●美味だが棘を持つ植物（①④）、●秋・また季節の推移（②⑨）、●飢餓の際の非常食（③）、●仙界の食べ物・不老長寿の象徴（⑦⑬⑮⑰）、●春季三月の花（⑩⑱）、●王吉の故事（⑭⑯）

続けて唐代以後杜甫以前の詩について整理しよう。『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）を確認すると、以下に示すように二三例を数えることができる。

〈初唐〉

- ①戎葵朝委露、齊棗夜含霜。（盧照鄰「山林休日田家」卷四二）
- ②飢共噬齊棗、眠共席秦蒲。（沈佺期「夜泊越州、逢北使」卷九五）

〈盛唐〉

- ③簞食伊何、臠瓜抓棗。（王維「酬諸公見過」卷二二五）
- ④神与棗兮如瓜、虎壳杏兮收穀。（王維「送友人歸山歌二首」〈其一〉卷二二五）
- ⑤四月南風大麦黃、棗花未落桐陰長。（李頎「送陳章甫」卷一三三）
- ⑥窮老一頽舍、棗多桑樹稀。無棗猶可食、無桑何以衣。（儲光羲「野田黃雀行」卷一三六）
- ⑦長雲驟落日、桑棗寂已晦。

（王昌齡「宿灞、上寄侍御璵弟」卷一四〇）

- ⑧親見安期公、食棗大如瓜。

（李白「寄王屋山人孟大融」卷一七二）

- ⑨酸棗、垂北郭、寒瓜蔓東籬。

（李白「尋魯城北范居士、失道落蒼耳、中見范置酒摘蒼耳作」卷一七九）

* 「酸棗」は「サネブト」でナツメの一変種。

- ⑩貧居煙火濕、歲熟梨棗繁

（韋應物「答僮奴重陽二甥」卷一九〇）

- ⑪大瓜玄棗冷如冰、海上摘來朝霞凝。

（韋應物「馬明生遇神女歌」卷一九四）

- ⑫村落皆無人、蕭條空桑棗。

（岑參「行軍詩二首」〈其一〉卷一九八）

- ⑬手護崑崙象牙簡、心推霹靂棗枝盤。

（包佶「宿廬山、贈白鶴觀劉尊師」卷二〇五）

以下、杜甫の詩と関わりのあると考えられる用例、並びに従来には見えない用例を順に確認しよう。

②は、沈佺期が越州（広東省合浦県）で宿泊したときに北方からの使者に出会い、その喜びをうたったものである。「飢えては共に齊の棗を噬らい、眠りては共に秦の蒲を席とす」にみえる「齊棗」も「秦蒲」も、北方を連想させる物資として描かれている。ここで注意したいのは、飢えをしのぐものとしてナツメが描かれていることである。これは、先にみた傅玄の詩を継承していると考えられよう。③は妻を亡くした王維が輞川

莊に住んでいるときに友人達が訪ねてきたものをうたったものである。ここに「簞食伊れ何ぞ、瓜を躡き棗を掴く」とあり、

自分のつまましい食生活を、ナツメを通して表現している。質素な生活を象徴しているという点で②に通じる点がある。

杜甫以前の唐詩において、ナツメがどのようなものを象徴しているのかを整理すると以下のようになるだろう。

- 齊州の名産・北の食べ物 (①②)、● 飢えをしのごく、質素な食べ物 (②③⑥)、● 神仙に関わる食べ物 (④⑧⑩)、● 春のおわりの花 (⑤)、● 冬の到来 (⑦)、● 隠者の住まい (⑨)、● 秋の象徴 (⑩)、● 荒廃した村 (⑫)、● 道士の道具 (⑬)

杜甫以前の詩におけるナツメはこのように、秋を象徴するものとして描かれていたり、楽器あるいは楽曲を象徴したり、また仙界や仙人の食べ物と関わる描きかたがされていることが確かめられるが、飢えを凌ぐ食べ物として描かれているものが「又呈呉郎」のナツメと大きく関連していると考えられよう。一句目の「無食」、三句目の「困窮」、そして七句目の「貧到骨」が、西隣に住む婦人の、非常に厳しい飢餓状態を意味しているのは明らかである。

従来、主流とまでは言えないが、飢えを凌ぐための食品としてナツメが描かれていることを踏まえると、杜甫はこうしたナツメのイメージを「又呈呉郎」において継承しているということができるだろう。

まとめ

改めて杜甫の詩を省みると、従来にはない板木に使われたナツメを描く例もあったが、主に仲秋を象徴する果実としてナツメの実が描かれていることが確認できた。

杜甫にとつてのナツメは、幼少期の秋の思い出と密接に関連している、幸せな生活と結びついた食べ物という意味合いが強い。また、秋を象徴する食べ物という点においては、『詩経』豳風に描かれていたナツメのイメージを継承している。

杜甫にとつてナツメは、飢えを凌ぐものであると同時に、客人をもてなす食べ物として、言い換えれば客人を満足させる果実として捉えられていたのではなからうか。単に飢えを凌ぐというよりも、人と収穫の幸せを分かち合うための収穫物の一つ——それがナツメであったのだろう。

ところで、『秋野五首』(其一)では、この婦人を単に「人」と表現していたのに対し、「又呈呉郎」では「西隣」と具体的にどこに住んでいるのか示されている。この語句について仇注は『易』既濟、九五の爻辞を引く。

東鄰殺牛、不如西鄰之禴祭。実受其福。

東鄰牛を殺すは、西鄰の禴祭に如かず。実に其の福を受く。

「禴祭」は、質素な祭り。東隣の牛を殺した贅沢な祭りよりも西隣の祭りのほうが実質的な福があることをいう。杜甫がわざわざ「西隣」と断っているのも、この不幸な婦人に幸福がく

ることを願っているからかもしれない。とすれば、ナツメはこの詩において、福をもたらし得る果実として、効果的な働きをしていると考えられよう。

【注】

① 杜詩の果物について言及した代表的な先行研究として、古川末喜『杜甫農業詩研究』（知泉書館、二〇〇八年）が挙げられる。ミカンを描いたものとしては、同書Ⅳ―Ⅰ「杜甫の蜜柑詩とみかん園経営」に詳しい。サクランボを描いたものについては、吉川幸次郎「桜桃」（『杜甫論集』筑摩書房、一九八〇年）に詳しい。

② 以下杜甫の詩を引用する際は『杜詩詳注』により、巻数だけを示すこととする。また、書き下し文・現代語訳は『杜甫全詩訳注（一）』（四）『講談社学術文庫、二〇一六年』を参照した。

③ 「呉郎」が娘婿を指す可能性に関しては、「又呈呉郎」の前にみえる、「簡呉郎司法」に附された清・顧宸『辟疆園杜詩註解』巻五に、「呉は必ず公の姻婭なるが故に呼びて郎と為し、之を親とするなり（呉必公之姻婭、故呼為郎、親之也）」という指摘がある。また、「郎」が娘婿を意味する具体的な杜甫の前例として、顔之推『顔之家訓』治家篇にみえる「南陽に人有り……性殊に儉吝なり。冬至の後女壻之に謁すれば、乃ち一銅甌の酒、数臠の臠肉を設く。壻其の単率を恨みて、一たび挙げて之を尽くす。主人愕然として、俛仰して益すを

命ず。此くの如きこと再びす。退きて其の女を責めて曰く、某郎酒を好むが故に汝常に貧たり、と（南陽有人……性殊儉吝。冬至後女壻謁之、乃設一銅甌酒、数臠臠肉。壻恨其単率、一挙尽之。主人愕然、俛仰命益、如此者再。退而責其女曰、某郎好酒、故汝常貧）」を挙げることができる。

④ 簡錦松『杜甫夔州詩現地研究』（二八四・二八八頁、台湾学生書局、一九九九年）、また、前掲『杜甫農業詩研究』（三〇六頁）参照した。

⑤ 漢名の植物を和名に比定するに際しては、伊東千恵子『中日植物名称対照表（増訂版）』（内山書店、二〇〇〇年）を参照した。

⑥ この詩に解釈については、連波・查洪徳『沈佺期詩集校注』（一九九頁、中州古籍出版社、一九九一年）、陶敏・易淑瓊『沈佺期宋之間集校注』（上冊二二七頁、中華書局、二〇〇一年）を参照した。

〔附記〕 ＊本稿は、平成二九年度語学文学会（於北海道教育学釧路校）において「杜詩と棗」と題し発表したものをまとめたものである。当日、多くの会員から御批評・ご指導を賜った。また本稿は、平成三〇年度SPS 科研費P16K1321「辟疆園杜詩註解研究」の助成を受けたものである。あわせて特記して謝意を表す。